Sakushin Academia Lab

CONCEPT BOOK

作 新 学 院

Sakushin Academia Lab

作新アカデミア・ラボ

『作新アカデミア・ラボ』

―それは“未来”という大海原を
切り拓いて進む「宙船（そらふね）」

「地図をいくら調べても、自ら歩き出さない限り目的地には着かない。」

仏教の教えです。

未来という大海原を越えて、幸福という目的地を目指す人生の旅は、
自らの意思で歩き出さなければ、どこにもたどり着きません。

未来は与えられるものではなく、切り拓くもの。

何を為すために、何を学ぶべきか。自ら思考し、深く学ぶ。

作新学院では、130年前の創立当初から「自学自習」を教育の第一に掲げ、
自律的な人材の育成を実践してきました。

やがて世界は、グローバル化、AI（人工知能）、ゲノム編集などにより
激動と混迷の時代へ。

誰かが正解を教えてくれるのを、待っている時代は終わりました。

地図もナビも役立たない、未来というワンダーランドを切り拓くチカラ
“人間力”を磨くため生まれた「アカデミア・ラボ」。

さあ君も、未来をデザインする旅に出てみませんか。

地球市民となるための旅立ち。
未来を拓くために何を学ぶか。

未来を切り拓くため、必要なチカラとは何でしょう。

それは、自由な発想力や創造力、豊かな想像力や行動力、高度なコミュニケーション力や語学力、そして主体的に生きるという強い意志（will）と高い志（vision）です。

たとえば、アカデミア・ラボで展開される多様な「アクティブ・ラーニング」。

自ら考え、発信し、他者と意見を交わす中で、考察力や思考力、プレゼンテーション力やディスカッション力を培います。

「シチズンシップ教育」では、グローバル市民としての資質・能力を育成するため、個人の権利と責任、人種・文化の多様性の価値など、円滑な人間関係の構築に必要な能力を養います。

たとえば、徹底して英語に浸る「イマージョン教育」。

英語以外の教科を英語で学習し、文字通り英語漬けになることにより、世界とコミュニケートできる生きた語学力を習得できます。

さらに高速大容量の通信回線と最新のICT設備により、世界の人々とリアルタイムで対話しながら、インターナショナルな交流や授業を実施します。

作新の学びの場、活躍の舞台。 それは世界です。

「作新」とは、新しきを作る。
〝革新（イノベーション）〟こそ、私たちの使命。

作新学院には、幼稚園から大学・大学院まで多様な年齢や分野、能力や個性を持った人材が集っています。

異質な物質どうしが結びつき、化学反応を起こすように、多様なヒト・モノ・コトが出会い、影響しあい、融合しあい、新たな価値が生まれる。

多様性こそ、イノベーションの源泉です。

グローバル化が進み、あらゆる物事がボーダレスになりゆく中、学校も米国MITの「メディア・ラボ」のように、自由で多様な「知と生命（いのち）の実験場」でありたい。

作新アカデミア・ラボが追求する、シンプルなビジョンです。

年齢や所属、分野や専門、言語、文化、民族…あらゆる違いを越えた知のセッションを通じて、社会の様々な課題を乗り越え、世の中を刷新して行く。

地域や社会にもっと門戸を開き、外部講師を招いたり、地元の企業やNPOとコラボしたり、社会と共に考え行動する。

日本開国の父・勝海舟によって名付けられた『作新』という校名。
そこに託された「革新を起こせ！」という思い。

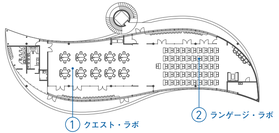
そのDNAは130年の時を経て、アカデミア・ラボへと受け継がれています。

志をのせ、今、新たな航海へ。

2F Quest & Global Space クエスト＆グローバル スペース

世界平和や地球全体の幸福を願い、世界とつながる

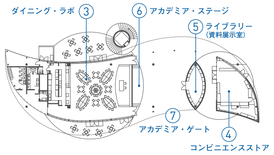
可動式の白い壁は、ホワイトボードやスクリーンとして活用でき、特別講座やカンファレンスなどの際には、300名超を収容できる講演会スペースにもなります。フレキシブルな空間で、自由で豊かな学習をサポートします。



1F Life & Innovation Space ライフ＆イノベーション スペース

豊かな“生命”と“暮らし”を創造する力を育成する

アカデミア・ゲートからほど近くにあるカフェ＆ダイニングスペース。通常時は生徒たちのダイニングになり、授業や課外活動では食育のための調理スペースとして活用します。また、学院を訪問された方のくつろぎや語らいのスペースとしてもご利用いただけます。



1 QUEST LAB クエスト・ラボ ► P.14

「自ら学ぶ」主体的な学習の場となるラボ。 机や椅子は自由に組み合わせたり移動できるので、アクティブ・ラーニングやディスカッションを効果的に行うことができます。

2 LANGUAGE LAB ランゲージ・ラボ ► P.18

高速大容量のWi-Fi環境が整ったラボは、世界とつながる起点となります。また、視聴覚教材や図書が揃うメディコム・エリアでは、自分にあった語学学習ができ、DVDの視聴のほか世界各国の洋書を閲覧することができます。

3 DINING LAB ダイニング・ラボ ► P.24

明るくおしゃれな空間で、昼食時は栄養バランスのとれたランチを提供し、授業では食育についての講義などで活用します。また、学院を訪れた人々の憩いのスペースとしてお使いいただけます。

4 CONVENIENCE STORE コンビニエンスストア ► P.28

食料品や学用品だけでなく、生徒と地元企業とのコラボ商品や作新のマスコット「さくしろう」のキャラクター商品なども展示・販売。また、学校指定のスクールアイテムも購入することができます。

5 LIBRARY ライブラリー（資料展示室） ► P.29

全面ガラス張りのショーケースには、甲子園春夏連覇の優勝旗、世界大会・全国大会優勝等の記念の品々、学院ゆかりの文豪たちの愛用品などが展示されています。

6 ACADEMIA STAGE アカデミア・ステージ ► P.42

子どもたちが登下校するゲートでは、学院みんなの写真で制作した「フォトモザイク」をご覧になれます。園児・児童・生徒から教職員まで輝く笑顔が皆さんを迎えてくれます。

7 ACADEMIA GATE アカデミア・ゲート

子どもたちが登下校の際に通る通称「アカ門」。
東京大学の赤門のように皆から愛され、本学のシンボルになることを願っています。

EDIBLE GARDEN 食育菜園（エディブル・ガーデン） ► P.27

近隣の方々に指導を仰ぎ、子どもたちが自分で種を蒔き、育て、収穫します。自分たちが育てた食材を調理し、食すことにより、生命のサイクルを実感し、自然環境や命の大切さを学びます。

1 QUEST LAB クエスト・ラボ

「真理の探究（クエスト）」という冒険の旅が、今ここから始まる。

「真の知性と教養の習得」「真理の探究」を目的とし、
本学の教育方針**「自学自習」**を体現するラボ。
学びの柱となるのは、**多様なアクティブ・ラーニング、世界市民となるためのシチズンシップ教育。**

未来を創造するために必要な論理的思考力、
構想力、発想力、プレゼンテーション力などを
「自ら学ぶ」主体的学習を通して育成します。
これからの時代は、課題を「解決」する力とともに、
課題を「設定」する力、その両輪が必要です。
だからこそ、作新学院では、現実の社会問題を題材に
問題の核心は何かを見定めるプロセスから取り組みます。

その探究は、学院の社会貢献活動ともリンクしており、
多彩なフィールドワークとして展開する中で、
実践の場は学外や社会にも広がっています。

自ら思考し、創造する学び
アクティブ・ラーニング

真に豊かで幸福な人生、社会を築いていくには、単なる知識のストックではなく、それらを駆使して自ら課題を設定し、解決する力が求められます。「アクティブ・ラーニング」は、その基盤となる主体性、思考力、コミュニケーション力を身に付け、知的成長を実現するための学習方法です。生徒自身が能動的に課題を捉え、グループディスカッションやディベートといった活動を通じて、周囲と相互に刺激を与え合いながら「普遍の真理」を探究していきます。自ら思考し、創造する学びは、設立以来「自学自習」を教育方針としてきた作新学院の伝統を受け継ぐものでもあります。

可変にして自在の学習環境
学びのスタイルも、自分たちでデザインする

机や椅子にはキャスターが付いており、自在に移動し、
組み合わせることができます。
通常授業はもちろんのこと、多彩なアクティブ・ラーニングやディスカッションなど、目的に合わせて最適なスタイルをデザインできます。
柔らかで自由な発想や創造力を生み出すのに適したスペースです。

全体討論

グループワーク

プレゼンテーション

ディスカッション

世界市民としての素養を身に付ける
シチズンシップ教育

シチズンシップとは「市民としての資質、素養」のこと。公共生活の中で、正しく情報を判断し、自律的・能動的に社会や政治に参加し、他者と合意形成する術を身に付けます。作新学院では、法や制度のあり方、多文化共生など、様々な社会的テーマを題材に、多様なアクティブ・ラーニングを通じてシチズンシップを育みます。さらに、NPOの協力のもと実施する模擬裁判や、裁判官による特別講義といった機会も設けており、生徒会活動や課外活動ともリンクしながら学外での実践（災害復興支援や貧困に苦しむ世界の子どもたちへの支援など）にも取り組んでいます。数多くの経験が、社会との関わりを自覚し、人間力を高めることにもつながります。

現代の複雑な社会問題を我が事として考え、深く掘り下げる
～シチズンシップ教育の実践例～

作新学院のシチズンシップ教育では、講師からの一方通行の授業ではなく、プレゼンテーションやポスターセッションといったアクティブ・ラーニングを取り入れ、子どもたち自身の洞察をベースに主体的・段階的にテーマの考察を深めます。講義では、18歳選挙権、民主主義を守るためのジャーナリズムの在り方、ポピュリズムや多数の専制を克服するには…など、高度に複雑化した現代の政治や社会の諸問題を取り上げ、外部講師を招いての特別講義も行います。自らの考えを深く掘り下げ、議論を交わす中で、よりよい未来への解決策を導きます。

プレゼンテーション

ポスターセッション

世界に向けて行動の輪を広げる
地球環境クラブ

小学部から高等学校までの有志、総員約170名を超える児童・生徒たちが参加する課外活動で、問題解決型学習の実践の場の一つでもあります。ボランティア系の「チーム・テレサ」、国際交流系の「チーム・コロンブス」、実験発明系の「チーム・ガリレオ」の3チームで編成され、地球環境保護と社会貢献をテーマに、学内外での活動をそれぞれ推進しています。地球環境クラブの本部は、クエスト・ラボに設置されています。

アフリカ一万足プロジェクト
靴を履けず、足にケガをすることで病気に感染し命を落としてしまう子どもたちを救うため、一万足の靴を集める活動。靴を再利用する「eco活動」と健康を守る国際貢献に学院全体で取り組み、約１万5000足の靴をアフリカに届けました。

「SSH」※の流れをくむ科学的探究
作新サイエンスアカデミー

文部科学省よりSSHの指定を受けて展開・発展させてきた独自のプログラムです。科学的思考の養成を目的に、国立大学や研究機関とも連携しながら、先進的な内容のテーマ学習を行います。先端科学を英語で学ぶ「科学英語」をはじめ、発展理数講座、小論文や歴史・地理・公民など教科の枠を越えて真理の探究に取り組みます。

※ SSH（スーパー・サイエンス・ハイスクール）
将来の国際的な科学技術系人材を育成することをねらいとして、「先進的な理数系教育を実施する高等学校」を対象に、文部科学省が指定するものです。作新学院高等学校は、平成 23 年度より 5 年間、SSH に指定され、現在もその流れをくむ活動を続けています。

2 LANGUAGE LAB
ランゲージ・ラボ

世界の人々と
リアルタイムでつながる。
学ぶのは、“生きた”
コミュニケーション。

視聴覚をフルに刺激することで、
英語をはじめとした**“生きた”コミュニケーション能力**と、
世界への広い視野を養うラボ。

作新学院では、語学教育において
作新メソッドともいうべき独自のプログラムを展開しています。
ネイティブの外国人教師による双方向型授業。
徹底した英語漬けの環境で学ぶ「イマージョン教育」の実践。
そして、高速大容量のWi-Fi通信を活用した
世界各国の人々とのリアルタイムコミュニケーション。

最新のAV機器や教材・図書を揃えたメディコム・エリアも設置し、
映画や音楽などのカルチャーを通じて
血の通った語学学習や文化体験が可能になります。
幅広い教養と国際感覚を身に付け、「世界」と向き合います。

オールイングリッシュで学際的教養を育む
イマージョン教育

「immerse」(浸す)に由来する言葉。文字通り英語漬けの環境で、英語以外の教科内容を学ぶプログラムです。作新学院では国立大学で教鞭をとる外国人講師による授業や、有識者によるオンライン講義を展開。英語力のみならず、学問領域を横断した教養の習得、また考察力や課題設定や解決に向かう筋道を創っていける人材の育成を目的としています。

作新独自の発表討論型イマージョン教育
力を合わせて「世界」の問題を考える

作新学院の「イマージョン教育」は、グループによる発表討論を取り入れたアクティブ・ラーニング型のスタイルが特色です。高校で学ぶ教科内容をもとに、より発展的なテーマが設定され、事前学習を経て、英語によるディスカッションを行います。参加者は、議事進行役、関連情報の調査役、語彙のサポート役、要約者のいずれかの役割を担当。他者と関わり合いながら、じっくりプロセスを経て学ぶことで、着実に語学力と考える力を身に付けていきます。

「イマージョン教育」講義・討論テーマ一例

「地球温暖化」「DNA」「ナノテクノロジー」
「再生可能エネルギー」「惑星探査」

視る、聴く、話す学習スペース

メディコム・エリア

［メディア × コミュニケーション］

ランゲージ・ラボには、自学自習やグループワークのための「メディコム・エリア」が設置されています。ラボ内の視聴覚教材（映画、ドキュメンタリー、大学案内DVD、リスニング教材、英語検定教材など）をパソコンを使って視聴できるほか、オックスフォードの児童書（教科書）や世界各国の洋書を閲覧できます。

トーキングブースは消音壁となっており、自由なコミュニケーションが楽しめます。グループワークや語らいの場に最適です。

エリアの一角には学習用ブースが個別に設けられており、視聴覚教材を利用して自学自習を行うことができます。

楽しみながら
実践的英語力を身に付ける

ランゲージカフェ

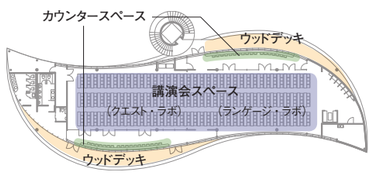
放課後を利用して、ラボ1Fのダイニング・カフェで気軽にお茶を飲みながら、ネイティブの教員とコミュニケーションが楽しめる時間を設けています。教室での英語学習とはまた違った、フランクな空気感の中で、自然と「生きた英会話」に親しむことができるとともに、社会で通用するコミュニケーション力も高まります。

幼少から英語力の基盤をつくる

キッズ英語教育

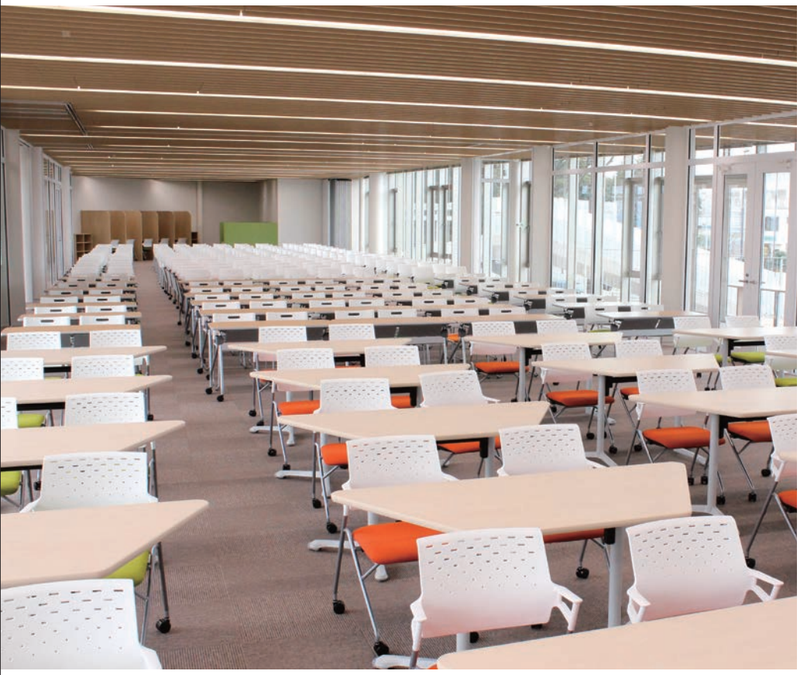
学年やレベルに応じた英語の絵本やCDを使って、リーディングの力と発音の練習を行います。英語教材には、イギリスで約80%の小学校に採用されている「国語」の教科書などを採用しています。教材は10段階にレベル分けされ、日常会話でよく使われる表現が繰り返し登場するため、英語力を伸ばすのに最適です。

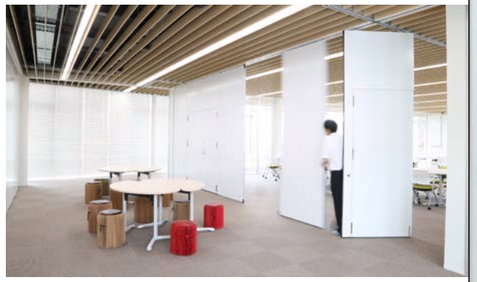
2F Utility Space



目的に合わせ、
ワンフロアを開放的な大空間へ

ラボの２階は仕切り壁を移動させることで 300 席超の講演会スペースになります。学校の内外から各分野の第一線で活躍する講師を招き、また地域の方々にも専門性を活かした講話をしていただきます。

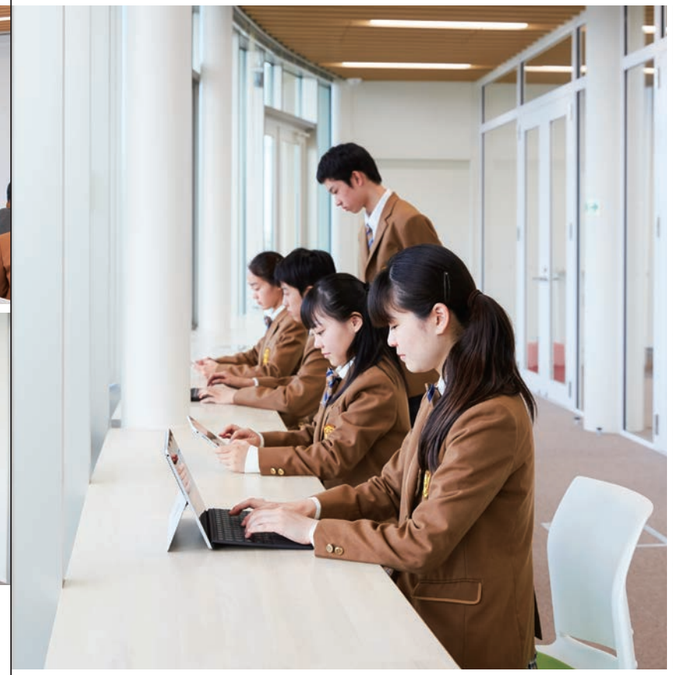




用途や人数に応じて動かせる可動式の仕切りで構成。板書のほか、映像も投影でき、アクティブ・ラーニングに適した自由度の高い設備となっています。

自然の光を感じながら、
伸びやかに学ぶ

２階にはラボの曲線に沿うようにしてウッドデッキが設けられています。カウンタースペースにはネットワークが完備され、ガラス張りの開放的な眺めの中で学習することができます。



カウンタースペース

ウッドデッキ

3 DINING LAB
ダイニング・ラボ

「食」の営みを、生きる力に。
“2つのLife”（生命×暮らし）を
デザインする。

自然の摂理の中で生かされていることに感謝し、
地球環境を守りながら、
心身ともに健康に暮らす大切さや術を学ぶラボ。

四季を感じながら本物や良質なものに触れ、感性を磨き、
「生命」としてのライフ、また**「暮らし」としてのライフ**を
ともに豊かなものにしていくことを目指します。

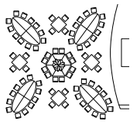
昼食時には専属栄養士の管理のもと
栄養バランスのとれたランチを提供し、
授業では**「食育」**についての講義などで活用します。

また、地域のシェフやパティシエを講師として迎え、
隣接する**「食育菜園」**で収穫した食材で
子どもたちと保護者が一緒に調理を楽しむ場にもなります。

人と人がつながる場として
作新コミュニティの
ホームステーション

ダイニング・ラボは、人と人、学校と社会をつなぐ多目的スペースです。学校行事やホームカミングなどのイベントの際には、バンケットルームとして使用することで、在校生はもちろんのこと、保護者の方や卒業生を含む「作新民」が集う場になります。学院の内外から多くの人が訪れ、いつでも笑顔と会話のあふれる空間。社会に開かれた作新学院の象徴です。

作新アカデミア・ラボの愛称「サク・ラボ」にちなみ、
桜の花びらをかたどってテーブルと椅子を配置。
中央のシンボルツリーは、季節ごとに樹木を入れ替え、
クリスマスや七夕には子どもたちと飾り付けを楽しみます。



「食」を通じて健やかな心身を育む
食育の実践

子どもたちが豊かな人間性を育み、生きる力を身に付けていくためには何よりも「食」が重要です。しかし近年、ライフスタイルの変化や食環境の変化により、栄養の偏りや生活習慣病などの「食」に関連した問題が浮上し、深刻化している現状があります。作新学院では、子どもたちが健康な心身を培い、学力・体力の向上を図る一助となるような「食」の提供を行い、文武両道（知育・徳育・体育）を支える「食育」を実践していきます。

学力向上ランチ

例）さわらの胡麻味噌焼き、
豆入りポテトサラダ、
きのこと豆乳のカレースープ他

脳をつくる良質なたんぱく質を中心に、脳の働きを良くするレシチン、カルシウム、糖質などをバランス良く摂取し、思考力や集中力をUPします。

パワーランチ
（瞬発力・持久力UP）

例）豚キムチ～温玉添え～
かぼちゃとチーズのサラダ
モロヘイヤスープ他

強靭な持久力を生み出す糖質やビタミンB1を中心に、鉄分、たんぱく質、カルシウムなどの栄養素を含むスタミナ満点の食事で、アスリートの身体をサポートします。

育む“味蕾（みらい）”、支える“未来”
ランチBOXプロジェクト“MI-RA-I”

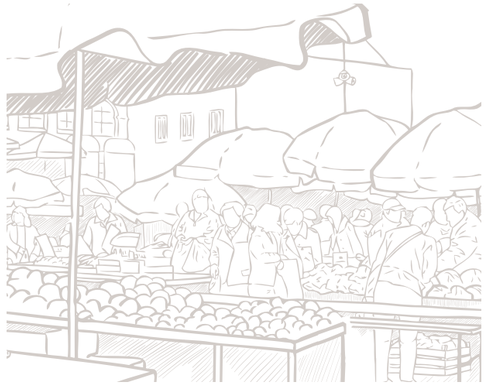
普段、偏った食生活を送りがちな子どもの未来を危惧し、「せめて1日1食でも良質な食事を」との思いから発足したプロジェクト。管理栄養士監修によるバランスの取れた食事を、ランチBOXにして1食ワンコインで提供しています。お昼になれば届く、安全で栄養たっぷりのメニュー。主菜（豊富なたんぱく質を含む肉や魚）、副菜（ビタミン、ミネラル、食物繊維を多く含む野菜）、主食で構成され、日替わりの美味しいメニューが教室で楽しめます。「育む“味蕾”、支える“未来”」をコンセプトに、健康的な食習慣の基礎をつくり、いきいきとした学校生活、そして未来をサポートします。

生命の循環を理解し、健康や人と自然との関わりを学ぶ
食育菜園（エディブル・ガーデン）

ラボに隣接するスクールガーデンです。子どもたちは近隣の農家の方に指導を仰ぎ、自ら土を耕し、種を蒔き、育て、収穫したものを食べることにより、生命のサイクルを実感し、自然環境や命の大切さを学びます。そして、ガーデンに隣接するコミュニティ広場には、収穫した野菜や果物を販売するマルシェが立ち、生徒が製作した石窯ではピザ作り…。地元の美味しいもの（農産物、スイーツ、紅茶など）、美しいもの（焼物、織物、工芸品など）を集め、地元の文化や伝統に対する愛着と誇りを育んでいきます。人と触れあい、自らの手と体を使って生産に関わるこうした体験の中で、子どもたちは大きく成長していきます。

エディブル・ガーデン
学内に菜園を作り、教育に役立てる取り組みは、食育の第一人者であるアリス・ウォータースが提唱し、世界的な広がりを見せてきた活動です。作新学院でもその教育的意義を重視し、貴重な学びの機会として位置づけています。

学内公募により美術デザイン科の生徒が制作したペイントバス
（ガーデニング用具などを収納します）



4 CONVENIENCE STORE
コンビニエンスストア

実用と実践の融合、
新発想のラボ型ショップ。

食料品やスクールアイテムだけでなく、
生徒と地元企業とのコラボ商品なども展示・販売。
実用（購買）と実践（学び）を融合させた
コンビニエンスストアです。
産・学・地域と協働する基地として
学外の関係者の皆さん、企業の方々とも積極的に連携し、
また、総合学園ならではの強みともいえる、
高校や大学に設置された各学部、各学科の
多様な専門性を活かした企画を展開していきます。
社会との接点でアイディアをカタチにしながら、
実践的に社会貢献をしていく場です。

5 LIBRARY
ライブラリー（資料展示室）

そこにある栄光と誇り。
「一校一家」が育んだ
“人間力”の結晶。

作新学院の歴史を彩る記念の品や、
学院紹介のパネルを展示。
作新学院の「人間力」を生み出す
「文」「武」「社会貢献」を
基本テーマとして展示されています。
部活動の栄光を讃える楯やトロフィー、
学院とゆかりのある文豪の自筆原稿や愛用品など、
一歩足を踏み入れただけで、過去から現在まで130余年に亘る
作新学院を知ることができます。

ライブラリーには、甲子園で3度の全国制覇を果たした硬式野球部の活躍の記録や、栄光の証である優勝旗も間近に見ることができます。また、日本競泳界のエース、萩野公介選手（リオ五輪金メダリスト）の在学時代からの記録も展示されています。

未来を拓くということ

＝ 教育対論 ＝

山中 伸弥

京都大学iPS細胞研究所 所長・教授

PROFILE

1962年生まれ。神戸大学医学部卒業、大阪市立大学大学院医学研究科修了（博士）。米国グラッドストーン研究所博士研究員、奈良先端科学技術大学院大学や京都大学再生医科学研究所教授などを経て、2010年より京都大学iPS細胞研究所所長。06年、受精卵のように体の様々な細胞に分化する可能性をもつ人工多能性幹（iPS）細胞をマウスの皮膚細胞から作製したと発表。07年にはヒトの皮膚細胞からiPS細胞を樹立したと発表した。
12年、ノーベル生理学・医学賞を受賞。同年、文化勲章受章。

Shinya Yamanaka × Kei Hata

予測のできない、激動の時代。
試練に満ちた人生という航海を導き
未来を切り拓く“羅針盤”とは

21 世紀最大の偉業と言われる iPS 細胞の生みの親として、ノーベル生理学・医学賞を受賞した山中伸弥教授。

医師を志した高校時代から変わることのない、「人を救いたい」という一念に突き動かされるように、受賞後もなお研究成果の実用化に向け、世界の第一線をひた走る。

「志・努力・チーム力」の三位一体を体現するその姿は、作新学院の掲げる「自学自習、誠実勤労、一校一家」の教育方針と見事に合致する。

その類稀な“人間力”を培った「教育」とは。
未来を拓く人間力を育む家庭や学校など、
その原点に光を当てる。

畑 恵（船田 恵）

作新学院理事長

PROFILE

1962年生まれ。早稲田大学第一文学部、お茶の水女子大学大学院卒業。学術博士（Ph.D. in Science Policy）。
84年、NHK入局後、フリーランスのニュースキャスターとして活動。92年、EC（現EU）の招聘を機にパリ留学。95年、参議院議員選挙で初当選。IT・科学技術分野を専門とし、議員立法「研究開発成果実用化促進法案」を策定。
2013年より作新学院理事長。

日本の教育は「ハードスキル」中心。
でも実際に世の中を生き抜いていくには
「ソフトスキル」こそが重要です。

—— 山中伸弥氏

「スーパーマンになれ」の教えのもと、失敗を繰り返して学んだ中高教育

理事長:お陰様で、以前からお話ししていた「アカデミア・ラボ」がようやく竣工しました。

山中:アクティブ・ラーニング中心の教育機関で、オープンラボなんだそうですね。

理事長:はい。以前、米国 MIT（マサチューセッツ工科大学）の「メディア・ラボ」を視察した際、全面ガラス張りで高い壁に遮蔽されない空間が、こんなにも創造力や発想力を自由に羽ばたかせてくれるのかと衝撃を受けました。ですから、アカデミア・ラボには固定壁がほとんどありません。机や椅子もキャスターを付け、用途に応じて瞬時にフォーメーションを変えられるようにしています。

山中:日本の教育はハードスキルと言いますか、知識を習得し受験やテストでいい点を取るという教育が中心。それも重要ですが、実際に世の中を生きていくためには、「ソフトスキル」が重要です。ソフトスキルとは、コミュニケーション力やチーム力、忍耐力、そして自分たちで考える力。自分たちで大きな課題をいくつかに分け、それぞれで分担して解決していくといったスキルがないと、社会ではうまくいきません。

理事長:作新で「人間力」と呼んでいる力が、まさしくそのソフトスキルにあたるのだと思います。ラボでは、教師が一方的に話し板書する授業は行いません。グループワークを基本としながら、プレゼンテーションやディスカッションを生徒たち自身が重ね、課題を解決する力を養います。

山中:そういう授業は、ソフトスキルを生徒さんたちに植え付ける意味で、本当に素晴らしい取り組みと思います。

理事長:ありがとうございます。先生は、ノーベル賞受賞後もiPS細胞の研究からその実用化まで、常に世界のトップを走り続けてらっしゃいますが、そのきわめて高いソフトスキルは、どこで養われたのでしょうか。

山中:いや、畑先生こそソフトスキルの塊だと思うんですが。ただ、僕にとって中学・高校での教育が、すごく役立ったというか、そこで身についたんだと思います。

理事長:大阪教育大学付属の中高一貫校で学ばれたんですよね。

山中:教育方針が、いい意味でほったらかしというか、ハードスキルも自分で勉強しなさいという感じで、行事とかクラブ活動がすごく盛んでした。先生から何も指図されず、自分たちで企画し、自分たちでやると。それで失敗は一杯するんですけど、まさに失敗から学ぶという校風でした。

理事長:先生と同い歳だからかもしれませんが、私の学んだ都立国立（くにたち）高校も完全な放任でした。制服も、校則も一切なく、髪を染めても化粧をしても、すべて生徒の自由。当時の都立高の中では受験偏差値が一番高かったはずなんですが、盛んなのはむしろ部活。野球部は都立高史上はじめて甲子園に出場しました。

山中:作新学院も昨年甲子園で全国優勝され、畑さんはよほど甲子園に縁があるんですね。

理事長:確かに54年ぶりの優勝だったんですが、それが丁度自分の年齢と同じ年だったりしまして。先生は、柔道部で活躍され、生徒会副会長も務められたとか。

山中:中学・高校と柔道部でした。大学に行ってからはラグビー部で。かなり本格的な体育会系の部活でしたね。

理事長:神戸大学の医学部に現役合格されて、医師国家試験にも順調に合格するその一方で、厳しい部活にも取り組まれていたとは、まさに超人的ですね。たしか高校時代に、「スーパーマンになれ」っておっしゃられた先生がいらしたと伺いました。

山中:そういう先生が、何人もおられました。

理事長:えーっ、何人もですか！

山中:そのことは子ども心にすごく影響していて、いろんなことをやるのが当たり前という雰囲気がありましたね。試験前でも、クラブや自治会の活動はやらなあかん。でも、テストの点数もある程度取らんといかんので、そこがもう創意工夫のしどころで。どうやってこの短い時間でやり切るか、常にそういうトレーニングや工夫をしてたような気がします。

理事長:そんなスーパーマンみたいな生徒は、山中先生だけじゃなかったんですか？

山中:いえ、結構いましたね。ただ、実際のスーパーマンは何をやっても成功するんですが、残念ながら僕たちはいろんなことをやってほぼ失敗するんです。でも、それは全然OK。中学・高校でソフトスキルをつけるっていう面では、むしろ変に成功するより、いろんな失敗を10代に経験する方が。当然、社会に出ると失敗が起きますから、その耐性というか、受け止め方が身につく。それに、失敗っていうのは一見失敗なんですが、実際にはすごいチャンスということも多いですから、失敗への対応力が身についた気がします。

理事長:ノーベル賞受賞に至る山中教授の萌芽は、まぎれもなく中学・高校時代の教育にあるんですね。

山中:いや、それは本当に、中高での教育環境に感謝してますね。

理事長:同じ文脈で語るのは先生に失礼なんですが、リオ五輪で金メダリストになった萩野公介選手も、作新で中高6年間を送りました。海外遠征などで一年の半分も授業に出られない中、学習面でも常にトップクラスの成績を維持していたんですが、同級生が用意してくれた授業ノートを、遠征先で自分の手で書き写して勉強していました。

山中:僕も中高の友達とはずっと付き合いが続いてますし、やっぱり宝のような友達が10代でできたことは大変な財産ですね。

子どもたちに内在する発想力や創造力を
アクティブ・ラーニングで引き出し
未来をデザインする。それがラボの使命です。

—— 畑 恵

「不変」の志のために「変化」を選ぶ。非直線型のキャリアデザイン

理事長:医学の道を志されたのは、お父様の勧めと伺っていますが。

山中：父は工場の経営をしていたんですが、跡取り息子の僕に仕事を継げとは言わず、高校生くらいの時から医者になれ、医者になれと言っていました。糖尿病と肝炎を患っていたため、息子が医者になってくれたら嬉しいと思ったのかもしれませんが。

理事長：お父様から託された夢を叶えたい、そしてお父様の病気を治したいというのがモチベーションになったと。

山中：医学に対する興味が生まれたのは、父親がきっかけだと思うんですが、当時は「お医者様」って感じで医師の力が圧倒的に強く、夜間診療もしていないとか。そんな中で、患者さん本位の医療をやろうというドクターが出てきて、そういう人の本を読んで、高校生くらいですから感化されやすいんですね。これは、すばらしいな、自分も医者になりたいと思ったんです。10代って、そういう正義感とか反権力主義とか持ちやすい年齢じゃないですか。

理事長：私がジャーナリズムを志した動機も同じでした。真実を一人でも多くの人々に伝えることによって、理不尽で矛盾だらけの世の中を少しでも理にかなった社会にしたい。ひたすら正義感に燃えていた気がします。先生も権威主義的なお医者様でない、市井の人々を救う医師を目指されたと。

山中：僕は、大学の医学部では整形外科医、中でもスポーツ医を目指していました。自分も柔道やラグビーをやってしょっちゅう故障やけがをして、涙が出るくらい痛い。ただそれでも練習をしないとレギュラーになれないというツラさがわかる。そういう選手を専門に診る医者になりたいというのが、学生時代のビジョンでした。

理事長:実際、整形外科医になられましたよね。

山中：はい。ただ最初に大きな大学病院に勤務したこともあり、患者さんの大半は重症のリウマチや骨肉腫といった重篤な病気やけがの人ばかり。とにかく、まったく治せない。自分にとって整形外科のイメージは、スポーツ選手を治して元気に帰っていくという明るいものでしたから、実際医師になってみると全然違った。

理事長：私も大学卒業後に念願のNHKに入局したんですが、自分の意思や考えを表現する機会が制限されていて随分とまどいました。ディレクター志望だったのに、配属先がアナウンサーということもあったとは思いますが。先生はその後、医師から研究者へと転身されますね。

山中:ええ。実は父親が亡くなってしまい、病気だった父に結局何もしてあげられなかったことで、医師としての道をどうドライビングしたらいいかわからなくなってしまって。そういうことがきっかけで始めたのが、研究なんですね。研究というのは時間がかかるけれど、今は治らない、治せない患者さんを将来治す可能性がある。学生時代に考えていた自分の将来とは、全然違うことを今やってるんですね。

アプローチは、変遷していいと思うんです。
こうありたいというビジョン、
世の中を少しでも良くしたいという「志」さえあれば。

—— 畑　恵

10年後が予測できない世の中ですから、
「直線型」だけでなく「回旋型」の人材も大切。
ラボでは、回旋型人材をどんどん輩出してほしい。

—— 山中伸弥氏

理事長:実は、先生が研究者という新たな道を選ばれた同じ年に、私もNHKを退局しフリーランスのキャスターとなりました。その3年後には文化政策や文化行政を学びに、パリへ留学。帰国後、文化予算の増額を国会議員に陳情したところ、「そんな金にも票にもならないこと、(国会に来て)自分でやったら」と言われまして。結局、国会議員になりました。

山中：国会では、研究成果が海外に流出してしまわないよう、基礎研究から実用化まで一貫した日本の科学技術体制を整備することに取り組まれていましたよね。

理事長：山中先生からもご指導をいただいて、議員立法を目指したのですが。そういう自分が、今は教育に携わっているのも不思議な話だと思います。

山中：割と日本の文化、社会というのは、直線型と言いますか。あまり変えない、この道一筋何十年という人が尊敬される。それは非常に良いことだとも思うんですが、アメリカには直線型の人と同じくらい、クルクルやることを変える人も多い。僕は、「回旋型」って呼んでるんですけど。

理事長：先生も螺旋階段を上るよう華麗な転身をされ、ノーベル賞という頂点をきわめられました。

山中:いえいえ。僕も同じことをずっとやっていると飽きちゃうというか。ただ、それは日本の文化とは相いれなくて、すごく引け目があったんです。でもアメリカに行くと、面白い人がいっぱいいた。例えば、iPS細胞のような新しい技術に、直線型がほとんどの日本人は飛びつかないんですね。アメリカは両方のタイプがおられるんで、回旋型の研究者はパッと今までの研究が残っていても飛びつく。だから、その研究がどっちに転んでも、アメリカはうまくいく。アメリカの多様性ですね、多様な人を認める強さというか。

理事長：アカデミア・ラボという建物も、直線を極力使わないでほぼ曲線でできてるんです。階段も螺旋階段ですし。均一で直線的な方が、教育現場も効率的ではあります。でも作新には、幼稚園から大学・大学院まで幅広い年齢層の子どもたちがいて、東大・京大に入学し医師や官僚になる子もいれば、オリンピック選手になる子もいる。商業や工業系で学んで、地域を支える礎(いしずえ)になる子も大勢います。

山中:今、学校に必要なのは、直線型と回旋型、両方いて良いんだというふうに育てることですよね。絶対、両方の生徒さんを育ててほしいです。

理事長：日本の学校教育全体で、取り組むべきことですね。自分も回旋型で職業は色々変わりましたが、振り返ると“思い”は常に一つだった気がします。ほんの少しでもいいから世の中を良い方向に変えたい。そこは死ぬまで変わらないと思います。

山中：終身雇用や社会保障といったシステムが変わっていく中で、直線型が一番安全という構造では、もはや日本社会はなくなっています。イノベーションが次々起こり、10年、20年後がどうなっているか本当に予測できない世の中ですから、直線型だけでなく回旋型の人材を日本はもっと輩出していかないと。そういう意味で、アカデミア・ラボでの教育は、非常にそういうことにつながると期待しています。

一人では社会を変えられない。必要なのは多様な「チーム」の力

理事長：先生はプレゼンテーションの最後に、必ず「うちのオールスター・キャストです」って、スタッフ全員の集合写真をパワーポイント画面に投影されますよね。それも研究者だけでなく、ラボテクニシャンや事務職員の方もすべて一緒に。

山中：それはみんな一緒に研究に参加してくれている仲間ですから、当然です。彼らの働きや頑張りなしに、どんな研究成果も生まれませんから。

理事長：そうした卓抜したチーム力がおありの山中先生だからできるのでしょうが、研究成果を実用化したり、大きな研究所のマネジメントをなさるのは、ノーベル賞を獲得するのとはまた違う能力が必要ですよね。

山中：そうですね。研究にはいろいろな段階があって、基礎研究というのは0（ゼロ）から1を作り出す研究。iPSができるまでは、僕は基礎研究者で最初は1人、その後も5〜10人の小グループで行いました。でもその1を10にし、10を100にしという応用研究になると基礎研究者とは違う才能が必要になります。さらに100を1000にという実用化への段階となると、患者さんを診ている臨床医や、特許や生命倫理の専門家、研究内容を社会に発信するコミュニケーターなど、いろんな人材がいないと、1を10に、10を100に、そして1000にとは行かない。そこで必要になるのが「チーム」なんです。

理事長：グループとチームは違うんですか。

山中：グループは、基礎研究者のグループというように同じような人が集まったもの。チームというのは、色々な違う才能の人たちが集まって構成するもので、グループとチームは明らかに違うと思うんです。基礎研究者だった僕に、チームを作るっていう課題がいきなり降ってかかったような。

理事長：0から1を生み出す能力と、1を100、1000にしていく能力は、まったく別の才能だと思いますから、通常は別の人が担当すると思うんですが。

山中：だから、僕も本当はやりたくないんですよね。0から1をやりたくて研究者になったわけですから。

多様性とは、強靭で豊かな未来を生む母。
均一的な教育は効率的ですが、
“違い”があるからこそ広がり、深くなる。

—— 畑　恵

基礎研究とは、「0（ゼロ）から1」を生み出す仕事。
その1を100、1000と発展させ実用化するには
多様な才能や人材、つまり「チーム」の力が不可欠。

—— 山中伸弥氏

理事長：でも実際、見事に実用化や研究所のリーダーを務めてらっしゃる。私は研究者だけでなく、マネジメントの才能もすごくおありだと思います。

山中：いえ、経営者だった父から、絶対におまえは経営に向いていないからやめておけって（笑）。ただ、このまま放っておくと1から100、1000へというところが、全部海外に流出してしまうんじゃという恐怖心があって。だから向いていないながらも、チーム作りを始めたわけです。

理事長：たしかに日本の科学技術体制というのは、基礎研究と応用・実用化研究の間に大きな断絶があって、貴重な研究成果が海外に流出してしまっている事態は危機的です。山中先生のように研究と経営双方に高い能力をお持ちの方が、日本のiPS研究という重要分野に存在してくださることが何よりの救いです。

山中：いえ、僕は研究者ですから、研究者は研究、経営者は経営と、僕に代わって実用化やマネジメントを担当してくれる人をいつも虎視眈々と探してるんですが。

理事長：でも、0から1の研究成果を生み出すだけでは、先生の志は満たされないんじゃないですか。

山中：あ、…そうですね。

理事長：先生が医師を目指された時のビジョンというのは、目の前で救われる人が現れて初めて達成されるわけですよね。

山中：はい。

理事長：だから先生は必死になって、そこまでは頑張ろうとされているように、私には思えます。

山中：基礎研究って始めてしまうと本当に面白いんです、0から1を作るっていうのは。今まで世の中の誰もやっていなかった、誰も知らなかったことを明らかにするっていう作業は、基礎研究者にしかできない特権みたいなもので。しかも、そこでは、あらゆる失敗が許される。一方、臨床医っていうのは本当に厳しい世界で、教科書、プロトコル通りにやらないと大変なことになってしまう。

理事長：違ったことをして失敗したら、患者さんの一生を変えてしまいかねませんよね。

山中：だからいつも極度の緊張感がありました。基礎研究をやりだすと、そこは全部解放されて、もちろんいい成果が出ないとストレスはありますが、臨床医の時のストレスとは全然違うんですね。だから基礎研究者としては、僕は1までやったんだ。あと、1から10、100にしていくのは他の人の仕事だと。

理事長：普通の基礎研究者ならそうですよね。でも、山中先生は違った。

山中：たしかにiPSに関しては、ちょっとそういう考えはなかったですね。iPSは0から1の1が、患者さんに近いんです。もともと患者

さんの細胞ですから、難病の○○君のiPS細胞って感じで。○○君の病気を食い止められるか、少年の運命がこの細胞の研究にかかっていると。

理事長：患者さんの顔が見えるんですね。

山中：そうなんです。普通の基礎研究だったら1のところで患者さんの顔が浮かんだりしないです。iPSの場合は浮かぶんで、もうなんとかしたいと思ってしまう。それもあって、1から10、100というところにも、いまだに関与しているんだと思います。

理事長：山中先生が臨床医、研究者、経営者と色々な人生を歩まれているのも、病に苦しむ誰かを一人でも多く救いたいという、高校時代に抱かれた初志を貫き続けているからなんですね。その結果が、ノーベル賞に至るわけですから。

山中：いえ、ノーベル賞は欲しいと思ったことは本当になくて、いわば、副産物。そう言ったら失礼なんですけど。ただ、普段、研究にしても、柔道やマラソンにしても、それなりの目標は決めてやってます。そこまでは頑張ろうという積み重ねが、自分のライフスタイルになってますね。

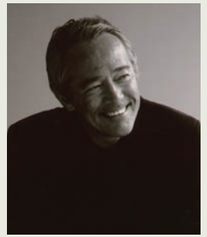
理事長：マラソンも、先日の京都マラソンでまた自己ベストを更新されましたよね。是非マラソンとともにiPS研究の第一人者として、世界のトップを今後も走り続けてくださることを、心からお祈りしています。

山中：ラボの今後を楽しみにしています。頑張ってください！

対談を終えて

「獅子搏兎（ししはくと）」（獅子は兎を捕えるにも全力を尽くす）。
対談を終えての率直な印象です。
山中先生には、科学技術政策を通じこれまで10年に亘りお話を伺ってきましたが、印象は常に優しく穏やか。ところが今回、対談開始から凄まじい集中力で一つひとつの質問に真剣に答えてくださる姿は、鬼気迫るほどで圧倒されました。
どんな些細なことにも全身全霊で取り組む生きる姿勢こそがノーベル賞を引き寄せ、世界の最前線を走り続けさせるのだと実感しました。
日本の教育にイノベーションを起こす“先駆者”たらんというアカデミア・ラボの志。その達成には、ひたすらの獅子奮迅が不可欠であることを、山中先生から教えていただいた貴重なひと時でありました。

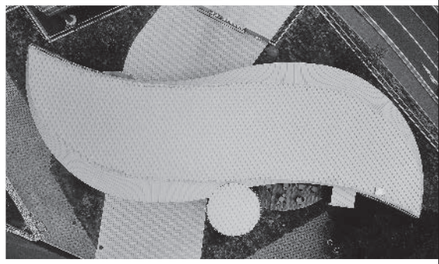
畑　恵



Message

作新アカデミア・ラボ設計者
建築家 ／ 鈴木エドワード建築設計事務所　代表

鈴木エドワード氏



作新学院の教育理念を体現する新たなシンボルとして設計しました。

作新アカデミア・ラボは、学院創立130周年を記念し、教育理念を具現化したシンボルとなる施設として設計しました。キャンパス全体の新たな「顔」、そして「ゲート」となることを基本に考え、建物の形状は作新の“S”を象っています。また、地元・宇都宮の旧家に見られる「長屋門」の形状を取り入れることで、来校者に対し「作新学院」そして「宇都宮」を象徴するアプローチ空間となるように計画しました。
設計において特に意識したのは、子どもたちはもちろん、市民の方々にも親しみやすく、気軽に訪れることができる場であること。そのために建物は外からより近く感じられるよう極力前面に配置し、また、光と風が通り抜け、そこに集う人々の息遣いや温もりが感じられるよう、その内側に佇むキャンパス全体がうかがえるような、透明感あふれる建築としました。
作新学院には、130年の歴史に育まれた品格、素晴らしい環境があります。学問のみならず、3度の甲子園での優勝、そして萩野選手のリオ・オリンピックでの金メダル獲得に代表される「文武両道」の精神に心から感銘しています。制服などにも洗練がうかがえ、その一つひとつに船田学院長並びに畑理事長の「愛」を感じざるを得ません。ラボでの教育を通じて、近い将来、作新学院からノーベル賞受賞者が誕生する日が訪れるのも決して夢ではないことでしょう。世界へ羽ばたく作新学院の未来に、私も期待しています。

PROFILE
建築家、鈴木エドワード建築設計事務所代表。1947年埼玉県生まれ。ノートルダム大学、ハーバード大学大学院アーバンデザイン建築学部卒業後、1974年バックミンスター・フラー・アンド・サダオ、イサム・ノグチスタジオ、1975～1976年丹下健三・都市建築設計事務所を経て、1977年鈴木エドワード建築設計事務所設立。さいたま新都心駅や渋谷警察署宇田川派出所、下鴨の家など、公共施設から個人邸、集合住宅まで幅広く手がけ、グッドデザイン賞、エコビルド賞など数々の賞を受賞している。科学、原子構造、哲学、形而上学などにも造詣が深い。

作新学院　学院概要

学院長　船田 元

「作新民」をさらなる高みに

私たち作新学院は、明治18年（1885年）、創立者 船田兵吾により設立されました。当時の日本は明治維新の直後。「文明開化」の大きなうねりが、ようやく地方にまで達しようとする中、兵吾はこのうねりを全身で受け止め、さらに拡大して行ける青年の育成を天命と知り、私塾・下野英学校を創ったのです。

江戸幕府の初代海軍奉行で黒羽藩主だった大関増裕は、藩校「作新館」の名を後輩の勝海舟から贈られました。しかし廃藩置県で廃校となってしまい、その名を惜しんだ兵吾は残された藩士の許可を得て、私塾を私立作新館と改名しました。

「作新」の名は古典『大学』の「作新民」に由来しますが、その後長く私たちの建学の精神ともなりました。自ら考え、自ら行動し、自らを新たにする人材は、戦後の日本の発展を支える原動力でした。そのお手本は欧米先進国であり、追いつき追い越せの掛け声が、内包する矛盾や歪みを掻き消してもいました。

しかし今、私たちは今後歩むべき道を見出せてはいません。

とりわけ人間が創り出したAIは、人間の存在を脅かすほど急速に成長しています。世の中はユニティを求め、多様性を敬遠しがちです。こうした今こそ、作新民の精神、それにより培われた人材の本領発揮の時です。

その実践の場として誕生したアカデミア・ラボ。ここから私たちの新たな挑戦を始めなければなりません。

答えのない、不確実な未来に向かって。

答えが一つではない、多様な未来に向かって。

設置校

作新学院高等学校

トップ英進部／英進部／
総合進学部／情報科学部

作新学院中等部

作新学院小学部

作新学院幼稚園

作新学院大学

経　営　学　部：経営学科／スポーツマネジメント学科
人間文化学部：人間文化学科
大　　学　　院：経営学研究科／心理学研究科

作新学院女子短期大学部

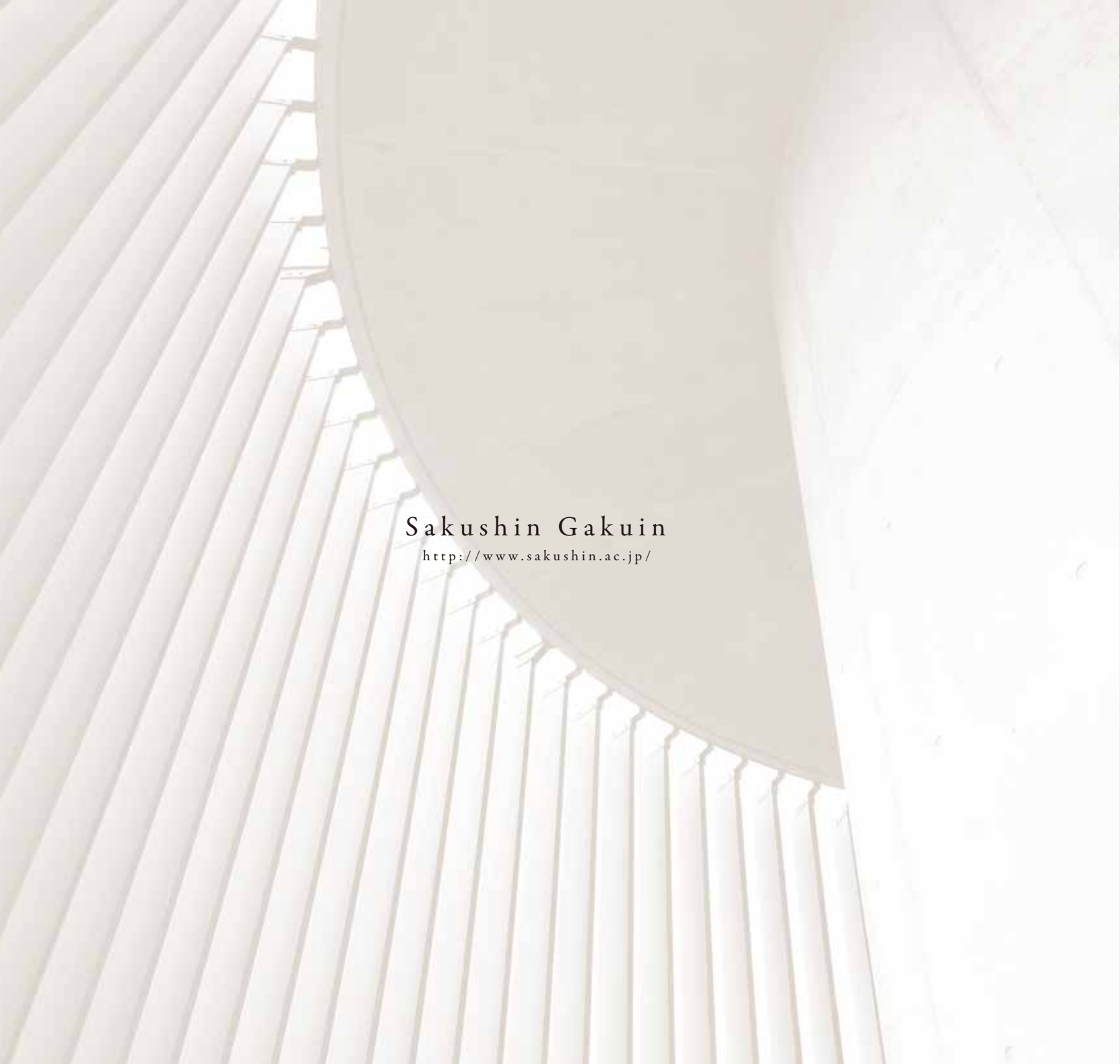
幼児教育科

作新学院のあゆみ

1885 明治18年	・船田兵吾が私立下野英学校を江野町に創立
1886 明治19年	・校舎を二里山（塙田村）に新築し、翌20年に移転
1888 明治21年	・旧黒羽藩の藩校「作新館」の名を受け継ぎ、私立作新館と改称
1895 明治28年	・文部省令に準拠し、私立尋常中学作新館と改称
1899 明治32年	・中学校令改正により、私立下野中学校と改称
1925 大正14年	・財団法人下野中学校に改組
1941 昭和16年	・財団法人作新館高等女学校を清水町に創立
1947 昭和22年	・作新館高等女学校と下野中学校を一の沢町に移転 ・下野中学校と作新館高等女学校を合併し、高等部（男女共学）普通科、中等部（男女共学）で組織する財団法人作新学院と改称
1950 昭和25年	・私立学校法により、学校法人作新学院と改称
1953 昭和28年	・男女共学の高等部を男子部・女子部併設の二部制にする
1962 昭和37年	・硬式野球部　全国初の甲子園春夏連続優勝
1967 昭和42年	・作新学院女子短期大学を開学
1985 昭和60年	・創立100周年記念式典挙行
1988 昭和63年	・高等部の英進コースを独立させて、英進部（英進科・進学科）を新設（高等部の三部制）
1989 平成元年	・作新学院大学（経営学部）を竹下町に開学
1991 平成3年	・高等部の商業科、情報科、電気科・電子科、美術（デザイン科）を統合して、情報科学部（流通経済科、情報科、電気科・電子科、美術デザイン科）を新設し、高等部を四部制に
1993 平成5年	・大学に大学院経営学研究科（修士課程）を開設
1995 平成7年	・大学院経営学研究科（博士課程）を開設
1999 平成11年	・短大を作新学院大学女子短期大学部に名称変更
2000 平成12年	・大学に地域発展学部を開設
2002 平成14年	・大学に人間文化学部を開設
2003 平成15年	・高等部を作新学院高等学校に名称変更 ・高等学校に総合進学部を設立
2006 平成18年	・作新学院大学に大学院心理学研究科修士課程を開設
2011 平成23年	・文部科学省からスーパー・サイエンス・ハイスクール（SSH）指定
2015 平成27年	・創立130周年記念式典を挙行 ・高等学校にトップ英進部を設置
2016 平成28年	・硬式野球部　54年ぶり夏の甲子園二度目の全国制覇
2017 平成29年	・作新アカデミア・ラボ完成

「一校一家」のもとに—
総合学園、作新学院。

「一校一家」の校風のもと、約5,800名が集う総合学園として発展してきた作新学院。
萩野公介選手が“オリンピックで金”、硬式野球部が“甲子園で金”を成し遂げた2016年、その快挙を記念して、
各設置校の在校生、教職員をはじめ多くの関係者の皆さんからの投稿写真でモザイクアートが制作されました。
モチーフは、オリンピックのメダルに描かれた「勝利の女神・ニケ（Nīkē）」と
甲子園の優勝旗に記された言葉「VICTORIBUS PALMAE（勝者に栄光あれ）」。
作新民としての絆と誇り、さらなる躍進への決意が込められ、
ここアカデミア・ステージから子どもたちを見守っています。
栄光ある未来へ、私たちの旅はこれからも続いていきます。



Sakushin Gakuin

http://www.sakushin.ac.jp/